



Title	国際協働教育から研究連携・地域連携への共創：URAが果たせる役割
Author(s)	森岡, 和子; 中野, 悦子
Description	RA協議会第4回年次大会：共創するURA～学術の発展と価値の創出～. 2018年9月19日(水)～9月20日(木). 主催：リサーチ・アドミニストレーター協議会. 神戸国際会議場. 神戸
Issue Date	2018-09-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96174
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/
Type	conference poster
File Information	2018RA_P-1-2.pdf



我々は部局URAとして、北海道大学の教育改革の柱である2種類のグローバル教育事業 **Hokkaidoサマー・インスティテュート（HSI）**、**海外ラーニング・サテライト（LS）**の実施支援を行っている。国際協働教育の支援業務は事務作業が多いが、URAならではの関わり方として、授業設計に意見を述べ、協働相手や機関との連携に深く関わり、情報ハブとしての役割を果たすことが、円滑で質の高い教育を実施する上で重要である。さらにURAが国際協働教育に関わることをきっかけとして、新たな**国際共同研究の開始**、**外部資金の獲得**、**地域連携の進展**といった、研究推進や外部連携に繋げていくことができる。国際協働教育に対してURAが果たせる役割と、教育活動にとどまらず、関係者とともに創り上げる研究連携・地域連携の拡がりについて報告する。

文化心理学および社会心理学ジャーナル投稿のための英語論文執筆ワークショップ（大学院）

■もともとは研究室内で閉じたワークショップを、SIとしてオープン化し単位化することを提案、開講予算を獲得

受講生の専門分野、レベルのばらつきに関する教員の懸念
⇒ 事前課題の提出など、受講条件をつけることで、受講生の専門分野とレベルの絞り込みを行う
大学院授業と学部授業（右欄：文化心理学の最前線）を続けて実施することで1科目あたりの招へい費用を減額する

★ 添削を受けた受講者の論文のうち、国際雑誌に投稿したものが3件、国際学会発表のアブストラクトに用いたものが2件 ⇒ **若手研究者養成につながる**

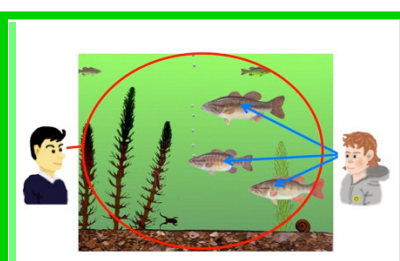
□SAGE一北大 社会科学国際優秀論文賞創設の基盤形成支援および英語論文執筆セミナー広報支援（本部URAおよび附属図書館との連携）



□招へい教員を「北海道大学パートナー」に推薦・手続



海外で活躍する本学同窓生（招へい教員：カナダ・アルバータ大学増田教授）に、**本学の広報・人的ネットワーク構築**を依頼
⇒ アルバータ大学における北大の知名度向上
⇒ アルバータ大学からの交換留学生のリクルート
⇒ 北大生のアルバータ大学への留学サポート



文化心理学の最前線

■留学前学生の挑戦の場として広報、支援

日本人招へい教員のメリットをフルに活かす授業設計。
⇒ 受講生の英語力によって適宜、日本語でサポートを行う
⇒ 海外で活躍する日本人研究者のロールモデルとして、学生の留学相談にも対応していただく
留学希望者に受講を勧め、教員やTAとのコミュニケーションを働きかける

■綿密な打ち合わせ⇒柔軟な対応

事前、授業開催中、事後の打ち合わせを綿密におこなうことで、学生の反応、レベルに応じた内容変更を柔軟に行う。URAはアクティブ・ラーニング部分の授業を見学し、学生の対応について意見を述べる。招へい教員の要望に合わせた評価シートを作成し、成績評価支援を行う

□先方大学との相互広報効果

授業風景の写真や、ウェブサイトの報告原稿を招へい教員の研究室と共有。相互広報を行うことで、交換留学生が増加する

■アルバータ大学等、海外TAの継続参加を可能にする滞在支援

滞在費、謝金を支給できる仕組み作り
⇒ 大学院生TAが継続的に参加可能に
⇒ 日本人学生の英語力・特徴にあわせた指導が可能に
⇒ TAの研究紹介の機会を設ける
学生同士の交流が深まり、研究ネットワーク形成につながる



東アジアの社会変動（香港中文大学とのLS）

■協働教育以前の交流実績のメリット

香港中文大学と北大は大学間交流協定を締結している。海外ラーニングサテライト事業を始める以前より、両校による共同シンポジウム開催の実績があった。URAは、その開催支援と広報支援を行っており、先方教員と面識があったため、協働教育の実施が円滑に始められた

■学生手続の一元化

学生派遣の諸手続情報を一元化し、旅行代理店、保険会社、大学事務担当との連絡調整を担当イレギュラーな事例を工夫で乗り切る

■独自の双方向プログラムの実施支援

香港中文大学で実施するLSとともに、北大で独自の受入れプログラムも開催し、双方向交流を続けている。先方学生受入れの諸手続、修了証作成等を担当

■成果の発信

学内でのLS報告会で、実施報告を行う。学外では、「日中大学フォーラム2017」にて総長の基調講演の中で紹介される

■派遣先大学変更の交渉⇒コンソーシアム化も視野に

香港中文大学受入れ教員がサバティカルのため、今年度は派遣先をタイ・ナレースワン大学に変更して「東南アジアの社会変動」として実施予定。国際部に変更のための交渉。将来的には3大学による国際協働教育の実施の可能性も



社会言語学：日本における言語とウェルビーイング

■学生の要望を反映した授業計画を提案

前年度アンケートから、PPT資料の配付希望、集中講義による授業のタイトさに関する意見があった
・ 教育情報システムを用いて、全受講生に事前配付
・ 事例収集を目的としたフィールド演習を取り入れる
⇒ 受講生アンケートの評価が上昇

■オープン・レクチャーを提案、広報支援

学内外から聴講希望が出たので、授業の1コマをオープン・レクチャー化した。収録も行い、招へい教員からも喜ばれた。

□外国人招へい研究者として研究交流

招へい教員がJSPS外国人招へい研究者として採用、北大教員と出版企画など研究交流を深めた。URAは、招へい研究者の報告用映像資料制作に協力した。

□学内研究者との研究ネットワーク形成の支援、共同調査の実施

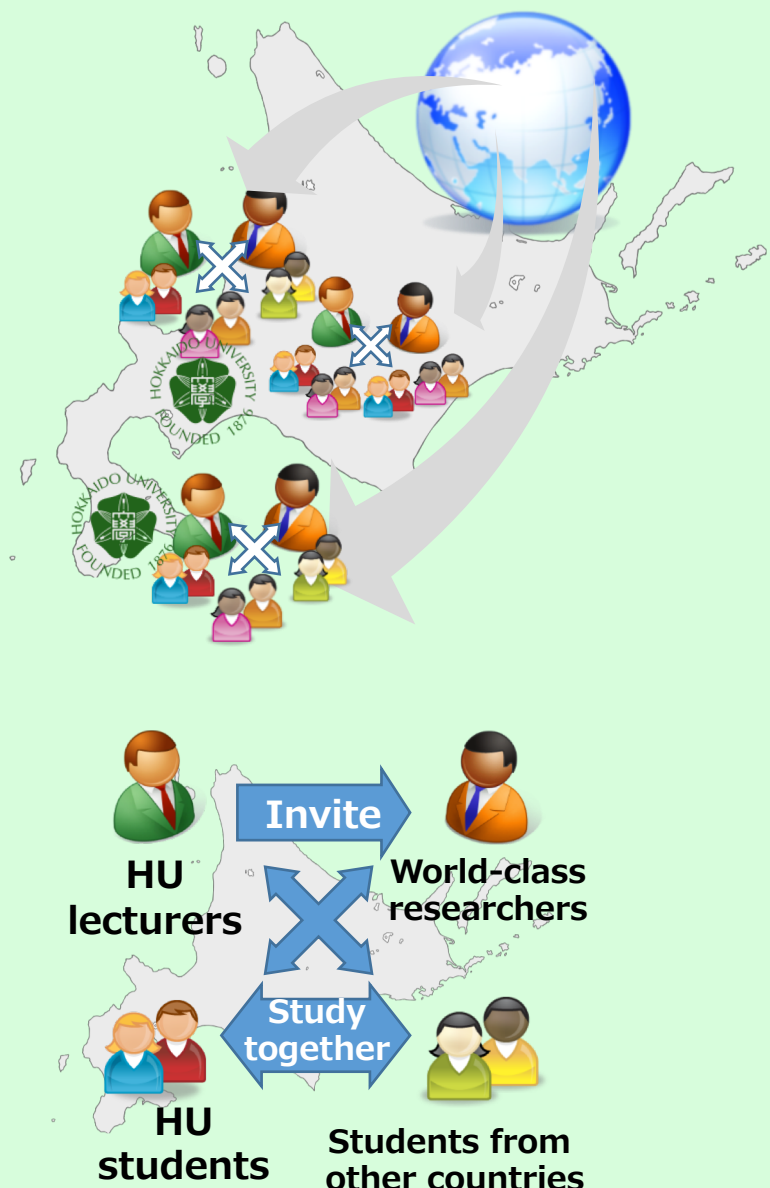
招へい教員がアイヌ語方言の研究者であるため、北大アイヌ・先住民研究センターとの研究ネットワーク形成を支援し、共同調査の実施につながった。



Hokkaido Summer Institute (SI)

世界の課題解決を目的に、世界一流の研究者や起業家などを夏季に集中して本学に招へいし、本学教員と協力して教育・研究活動を行い、北大の国際を推進する

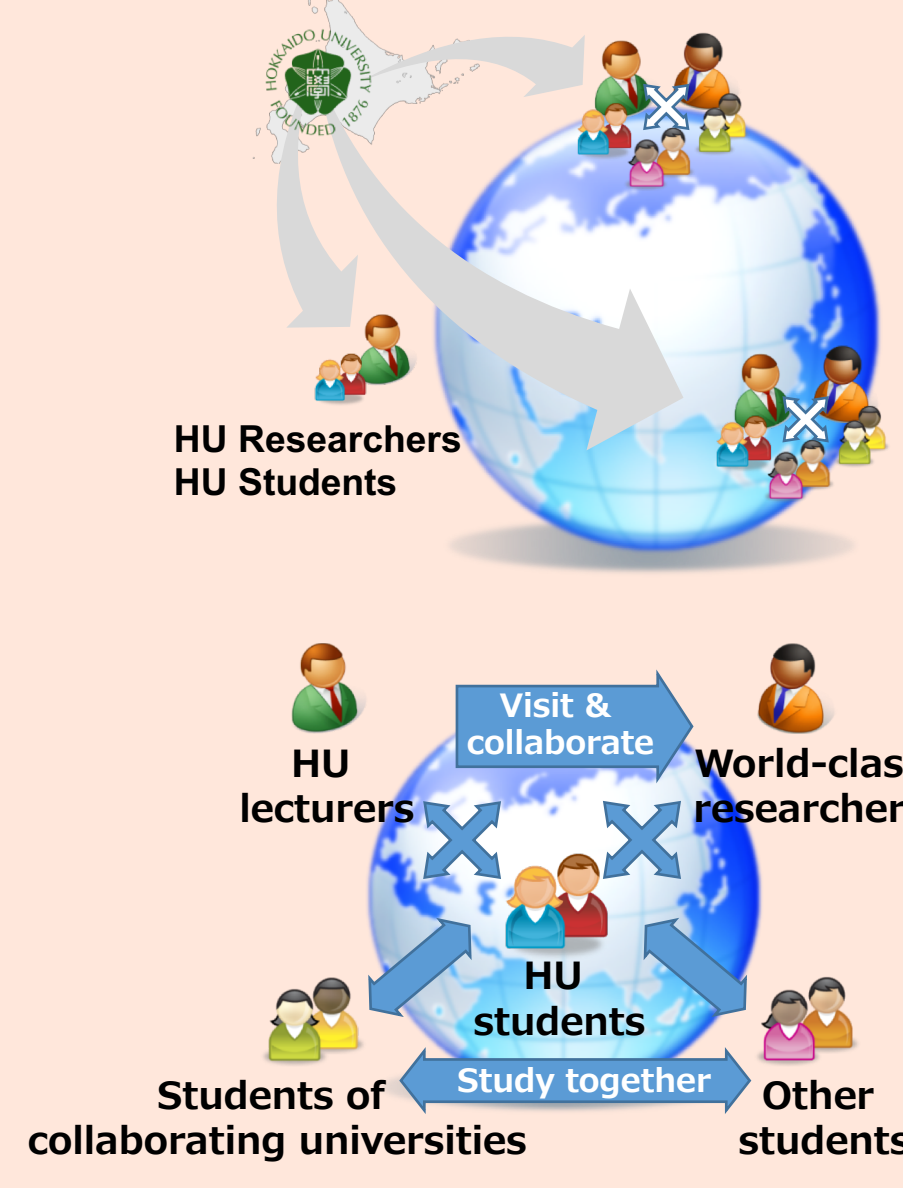
Accept world-class researchers & students from all over the world



Learning Satellites (LS)

世界中の課題の現場や課題解決の知識が集積している機関に、本学の教員と学生を派遣して研究・教育活動を実施、海外展開力の強化を図る

Send HU Researchers & Students to all over the world



日本における植物、民族、先住性



北米における植物利用と先住民

～トロント大学との現在進行形の準備中企画～

■もともとは先方学生のフィールドワーク受入れプログラムを、北大生も共修し単位化することを提案、予算獲得

トロント大学教員から研究交流のある本学教員に、国際教育プログラム受入れの打診があった。先方学生の受け入れ協力のみ計画していたところを、夏期間以外の受入れ事業（サマー・インスティテュート・サテライトスクール；**SI-SS**）として、北大生共修・単位化を提案。関係各所と調整の上、10月に国際協働教育の準備中。

■今年度は受入れプログラム（SI-SS）として、来年度は北大生をトロント大学に派遣して、先方学生と共修するLSとして計画

植物考古学、先住民研究を軸に、日本と北米をフィールドとしてそれぞれ比較しながら学ぶ、相互交流プログラムとして設計。学内申請時期と交渉時期が合わず、当初担当教員が来年度実施を見送ろうとしていたところを、URAが学内関係部署と交渉して、次年度実施計画の提出を行う。

■国際交流協定の締結を視野に入れて交渉を進める

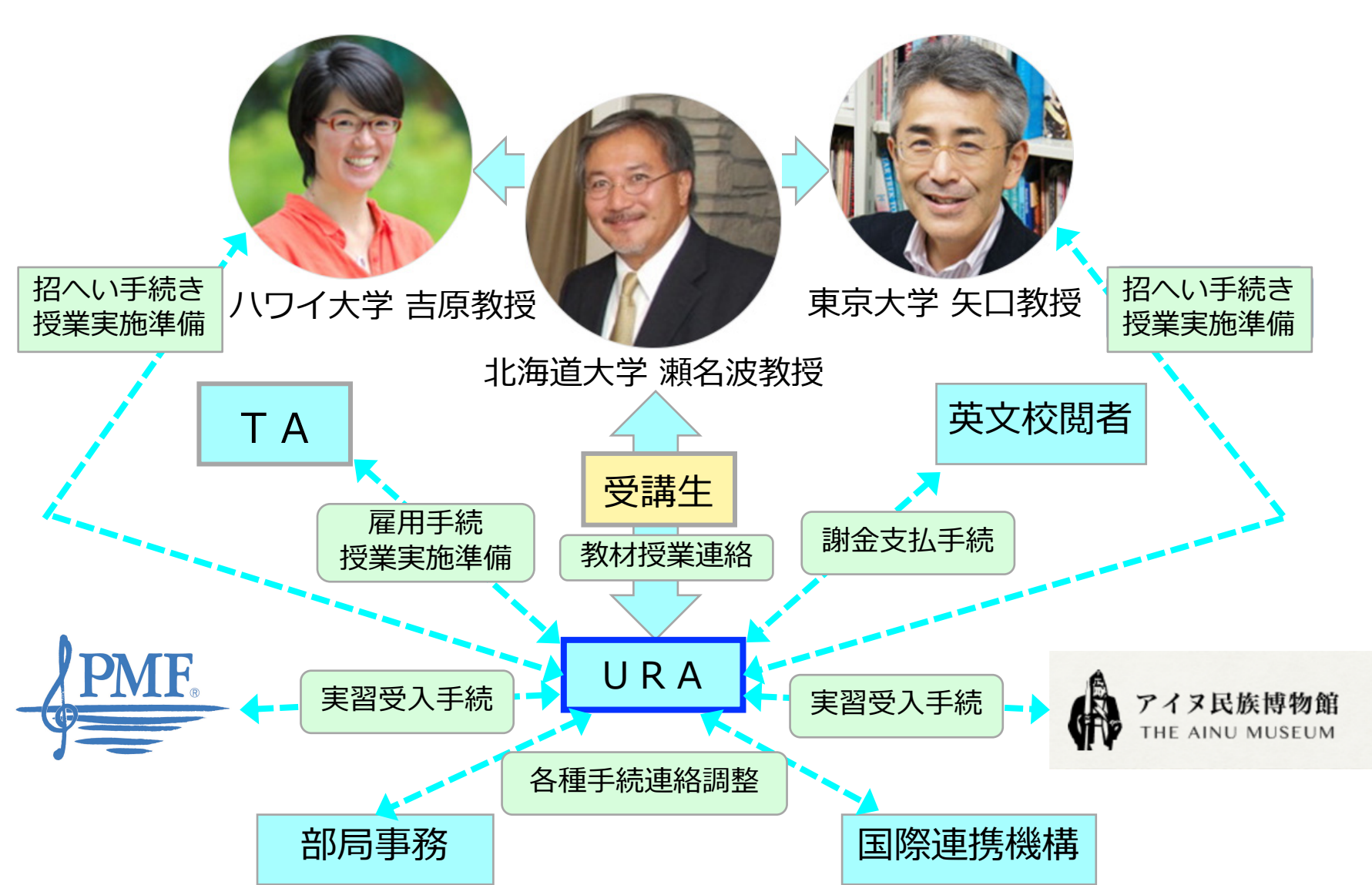
北方研究を特色とする北大が、カナダで規模、ランキングトップのトロント大学と協定を結ぶことは、今後、北方研究・教育の両面において、双方に大きなメリットをもたらすであろう。



パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）：芸術、政治、経済

【実施支援体制】

■情報ハブとしてのURA



【地域連携】

■PMFとの相互協働授業

吉原教授 → PMF教育セミナーを担当
PMF講師 → SIの授業1コマを担当

■博物館・PMFへの提言

アイヌ民族博物館
見学・講義の後、受講生が国立化する博物館に対して、展示に関する提言をまとめて提出。
PMF組織委員会
講義、リハーサル見学、コンサート鑑賞、アカデミー生へのインタビューの後、受講生がPMFの今後のあり方について提言を行った。

【波及効果】

□出版企画が立ち上がる

東京大学から「国内の国際研修実践」に関する出版企画が立ち上がり瀬名波教授に原稿依頼。原稿の中でURAの役割について記載。

□札幌市との連携強化

文化庁等、外部資金応募の際に相互協力を行う。札幌国際芸術祭など、別の文化プロジェクト・活動との連携が拡大していく。

【成果の発信】

■グッド・プラクティスとして学内外に紹介

学内
海外との協働教育の量的拡大と質的充実を図るための「HUCIフォーラム」で先駆的事例として事例報告（教員とURAが共同報告）

地域連携

札幌市、札幌商工会議所、北大による「国際化に向けた三者会議」で紹介

学外

★東京大学主催公開シンポジウム：「世界の中の日本、日本の中の世界ー『国内で実施する国際研修』の挑戦」で事例報告
★この報告の動画は、「東大テレビ」にて公開中
★雑誌『教育音楽』にてこの授業の取組が紹介（沖縄県立芸術大学 谷本教授の取材記事）



その他

■事務担当者別・時系列手続ガイドの作成

部局で作成したものを参考に、次年度より国際交流課が改訂版を作成、全学版ガイドとして通用。事務職員との連携を強化。

■食文化への対応の要請

食事を伴う活動がある場合、アレルギーやベジタリアン、ベガン、ハラル食の対応が必要となる。海外学生の学びやすい環境づくりのため、国際交流課に要望を伝え、大学生協にSI期間中のハラル食メニューやハラル食対応商品を増やしてもらう。

■看板・案内板の改善

海外学生が迷いやすい案内板、英語表記がされていない看板を指摘し、改善につなげた。SIのみならず、大学環境のグローバル化につなげた。

■教務情報システムの改善

受講生のカテゴリが、学部専門科目学生、他学部受講学生、交換留学生、北大内特別プログラム学生、海外からの参加学生など複数存在。カテゴリごとにあった受講者名簿を一元化し、受講生への連絡や成績評価を円滑にできるように、学務部と国際部間の調整を依頼。不完全ながらも改善が重ねられている。

■部局オリジナル広報

部局学生、他学部学生、部局間交流協定校向けなど、ターゲット別に独自広報を展開、SIの認知度向上と受講生確保に努めた。

URAだからこそできること

■現行ルールでは無理！前例がない⇒本当に無理なのか？前例、つくっちゃえ！

前例のない要望に対しては、今ある枠組みの範囲を見極め、何ができるか、どこまでできるか、何らかの形にしてみる。現状では実現困難なことも改善の可能性があれば、将来に向けて要望をあげて、改善につなげていく。

■情報ハブとしてのURA

授業（プロジェクト）実施に関わる全体業務を把握し、各ステークホルダーとの連絡調整を行い、円滑な実施を実現。この**統合力、調整力、企画運営力**がURAのいちばんの強み。

■種を拾い、実へとつなげる

単発的教育活動にとどまらず、
・ **継続的な教育活動**：関わる人たちが次の年も継続して授業を実施したいと思えるような基盤形成と成果
・ **研究活動への発展**：教育で形成したネットワークを新たな共同研究や研究プロジェクトの創成
・ **地域連携の促進**：地域の協力機関・組織とWin-Winの関係に、今後のグローバル連携の発展につなげていく仕掛けをつくっていく

⇒ **国際協働教育だけではない**
さまざまなプロジェクトにおいて、URAに求められること

種から実へとつなげるには

□研究者の要望をしっかりと聞く⇒傾聴でつくる関係性

海外の研究者との連携プログラムでは、招へい研究者やホスト教員の要望が、日本の大学の「常識」に合わない事態が頻発する。要望通りにならなくても、じっくり話を聞くことで、代替案や落としどころが見えてくることがある。しっかりと向き合い、要望の実現に向けて真摯に対応することで、実現しなくても納得してもらえるよう努力する。

□隠せず提案する⇒成果でつくる関係性

非専門家だから見えることもあるはず。授業撮影やフィールドワークへの同行、アンケート分析から、評価できる点を伝え、改善点を提案していく。改善により授業評価が上がると、協働授業設計のチームの一員になれる。

□ふとしたつばやき、日常の雑談、夢語りを心に留めておく⇒関係性から新たな成果へ

研究者のそのつばやきに、すぐには対応できなくても、URAのもとに届く

・ 外部資金情報、研究関連情報
・ 外部からの原稿依頼、招待講演、セミナーの依頼
・ 共同研究、地域連携、産学連携の申し出
・ 分野横断的なプロジェクトの募集 等々、
さまざまな情報の中からその研究者に適した情報をセレクトし、関係者とともに新たな研究連携や地域連携を創り上げていく。

